

## 東京裁判：通州事件に関する日本軍人の証言

### ①天津歩兵隊長・支那駐屯歩兵第二連隊長 萱島 高 陸軍中将

国立国会図書館法廷証番号 2498：萱島 高 宣誓供述書／弁護側文章番号1090

極東国際軍事裁判 (1947) p 170～p 171

国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィルム

私は元陸軍中将で宮崎県高鍋町一七八四に住んで居ります。私は昭和十年（一九三五年）三月より昭和十二年（一九三七年）十一月迄天津歩兵隊長及支那駐屯歩兵第二連隊長として天津に駐屯して居りました。

昭和十二年（一九三七年）七月二十八日私は連隊主力を率い北京南方の南苑の戦闘に参加しました。此日夜は豊台に集結し、翌二十九日は豊台西方大井村附近に移動し、同地にて後命を待つて居りました。

翌三十日朝三時河辺旅団長から通州に事変が起ったので速かに之を救援せよとの命令を受けました。三時三十分私は連隊主力を率い通州に急行致しました。

之より先通州は冀東政府の所在地であり、約七、八百人の日鮮人が居留して居りましたので居留民保護の為歩兵第一連隊より約一小隊を配置してありました。

通州に事変が起ったと云うことでありましたが其の当時それが何のことか全く判明せず、只日本人が虐殺されていると云うことだけは仄かに知りました。そして二十九日は通州方面に火災が起り黒煙が天に沖して居りましたので何事か起っていると云うことは知つて居りました。

通州に到着したのが午后四時であります。到着する迄に通州に在る日本人が大量虐殺されたこと、守備隊も苦戦に陥り全滅に瀕していると云う情報を断片的に知りまして、我々は殆ど休憩もせず大急行で通州に参りました。

我部隊が通州に到達するのを見て敵は東北方に退却して姿を見せません。従つて我々は戦闘を交えることなく通州に入城しました。

城内は実に凄愴なもので到る処無惨な日本居留民の死体が横はつて居りまして殆ど全部の死体には首に縄がつけられてありました。頑是なき子供の死体や婦人の虐殺死体は殆んど見るに耐えませんでした。我々は驚愕と悲憤の念にかられながら、急ぎ守備隊に参りました。守備隊は約

三十名であり別に自動車隊六十名合計百名内外でありました。二十九日早朝から約三千名の支那兵の攻撃を受け窮地に陥り苦戦しましたが、幸石造建築物を利用しておりましたので全滅は免れました。然し二十名位の死傷者がありました。

私は直ちに城門を閉て城内の搜索を始め残って居る日本人を狩り集めました。七、八百人居りました日本人で集まって来たのは百五十名位でありまして三百五十名位は死体として発見されました。残り二、三百名は何処かへ逃げたか或いは虐殺されたか不明でありました。

守備隊は攻撃し日本人の虐殺を行ったのは保安隊でありましたことが判明しました。

当時私は仔細に状況を調査し上司に報告しました。

其の記録は今日ありません。従て私は私の目撃したことを主として記憶を辿り左に陳述します。然しそれは余りにも残酷でありましたので、私は一生忘れることの出来ない印象となって頭に残って居ります。

- 一、旭軒とか云う飲食店を見ました。そこには四十から十七、八歳迄の女七、八名は皆強姦され、裸体で陰部を露出した儘射殺されて居りました。其の中四、五名は陰部に銃剣で突刺されて居りました。家の入口には十二、三歳位の男子が通学姿で射殺されて居りました。家の内は家具、布団、衣類等何物もなく掠奪されて居りました。其の他の日本人の家屋は殆んど右同様の情態でありました。
- 二、商館や役所の室内に残された日本人男子の屍体は射殺又は刺殺せられたものでありますが殆んどすべてが首に縄をつけ引き廻した形跡があり、血潮は壁に散布され全く言語に絶したものでありました。
- 三、錦水楼と云ふ旅館は凄惨でありました。同所は危急を感じた在通州日本人が集まった所でありましたものの如く大量虐殺を受けでおります。玄関、入口附近には家財、器具破壊散乱し目ぼしきものは殆んど掠奪せられ、宿泊していた男子四名は座敷で射殺されて居りました。錦水楼の女主人や女中等は珠子繋ぎにされ手足を縛した儘強姦され、遂に斬首されたと云ふことでした。
- 四、某日本人は夫婦と嬰兒と三名で天井裏に隠れ、辛じて難を逃れて居りましたが、其の下で日本人が次から次へと虐殺されてゆくのを見たとき私に告白して居りました。

昭和二十二年（一九四七年）四月九日於東京

供述者 萱島 高

右は当立会人の門前にて宣誓し且つ署名捺印したることを証明します

同日 於東京

立会人 今成 泰太郎

宣誓書

良心に従い真実を述べ何事をも黙秘せず又何事をも附加せざることを誓う

(署名捺印) 萱島 高